

これまでの会議を通じて下記、委員会で文化振興の課題と指摘された事項と進行管理について下記のように整理してはいかがでしょうか？

(1)これまで委員会で課題と言われてきた論点

1. 市文化事業の認知度の低さ

市が実施している主要な5つの文化事業(文化祭、奥河内音絵巻、マイタウンオペラ、ミュージカル、ロビーコンサート)について、「知らない」という市民が多数派であることが指摘。

特に49歳以下の若年・壮年層では、事業によって6割から9割近くが「知らない」と回答。

2. 「興味のある分野がない」というミスマッチ

文化芸術を観賞・参加しない理由として、「興味のある分野の公演がない」ことが挙げられた。

会議では、公共事業としてどこまでエンターテインメント性を重視すべきか、あるいは市民が主体的に表現に関わる機会をどう増やすかが議論された。

3. 時間的制約による参加の困難さ

特に働き盛りの世代(30代～40代)において、「観覧する時間がとれない」「活動する時間がとれない」という回答が目立っている。

仕事や生活のなかで文化活動に割く時間の確保が、市民にとって大きな壁となっている。

4. 情報発信の格差と到達の遅さ

情報発信については、満足層と不満足層で評価が真っ二つに分かれています。

・ 情報の「壁」

文化に関心の高い層は広報誌などで情報を得ていますが、関心の低い層には情報が届いていません。

・ デジタル発信の課題

ネット上の情報が探しにくく、イベント直前に情報を得ても参加できないなど、発信のタイミングや検索性に苦勞する声を示されました。

5. 文化の「閉じられた」印象と観光への期待

・ 施設内に留まる活動:

会議では、文化活動がラブリールホールなどの施設内(箱の中)で完結しており、「外に活動が見えていない」ことが課題視されました。

・ 観光・都市整備との連携

市民が今後文化との結びつきを期待する分野の第1位は「観光振興」、第2位は「都市整備」であり、これまでの「福祉」や「生涯学習」中心のニーズから、地域の活性化や街の魅力向上へと市民の関心が移っている。

6. 子どもへの体験機会の不足

行政に求める役割として、「子どもが日常的に文化体験できる環境の整備」を求める声が2番目に多く、子育て世代の強い関心が示されています。

(2)計画の進捗状況を把握するために、評価指標に追加してはどうでしょうか？

事業の実施数(アウトプット)だけでなく、市民アンケートによる「環境の変化」や「満足度」といった成果(アウトカム)を指標として設定し、アウトカム指標の導入し、10年後の姿を測定してはいかがでしょうか？

1. 市文化事業の認知度の低さ

市が実施している主要な5つの文化事業の認知度 ○%以上

2. 「興味のある分野がない」というミスマッチ

文化芸術を観賞・参加しない理由として、「興味のある分野の公演がない」ことへの指標
ラブリーホール入場者者数
文化振興事業述べ参加者数

3. 時間的制約による参加の困難さ

特に働き盛りの世代(30代~40代)の文化にかける時間が増えた 等

4. 情報発信の格差と到達の遅さ

情報発信については満足層の満足度

5. 文化の「閉じられた」印象と観光への期待

観光・都市整備との連携について、文化がコーディネーションを実施し、多様な主体の共創を促進するコーディネート体制の整備事業の実施

※観光振興への期待

アンケートで「文化との結びつきを強めるべき分野」の第1位が「観光振興」であったことを受け、文化財や自然を観光資源として積極的に活用し、にぎわいを創出する視点が不可欠とされました。

6. 子どもへの体験機会の不足

行政に求める役割として、「子どもが日常的に文化体験できる環境の整備」への満足度

(3)その他、会議ででてきた論点

1 人材育成と「コーディネート機能」の再定義

第2期計画からの最大の継続課題として、人と文化、あるいは異なる分野を繋ぐ「コーディネーター」のあり方が議論されました。施策に反映しないとしても、推進計画の論点として継続議論するなど、論点を明示してはどうか？

または P27 にコラムを文化振興計画推進委員会での議論を掲載してはどうでしょうか？

【コラムイメージ】

文化を繋ぎ、新しい価値を創り出す「翻訳者」としてのコーディネーター

第3期計画において、文化振興の鍵を握るのは「コーディネーター」という存在です。しかし、ここでのコーディネーターとは、単に事務的なスケジュール管理を行う「調整役」ではありません。文化振興計画推進委員会の議論では、コーディネーターの真の役割は、異なる分野や人々を繋ぎ、新しい価値を生み出す「翻訳者」であり「伴走者」とであると定義されました。

異なる「言語」を翻訳し、対等な関係を築く

アーティスト、福祉施設、教育現場、そして行政。それぞれが持つ異なる価値観や専門用語（言語）を相互に理解できるよう通訳し、お互いの強みを引き出し合う「対等な関係(対等性)」を構築します。例えば、山を鳴らしたいアーティストと、舞台を支えるホールの専門性を繋ぐことで、これまでにない感動が生まれます。

ピラミッド型から「ネットワーク型」の共創へ

これまでのトップダウンの組織運営ではなく、市民や団体が自発的に繋がり合う「ネットワーク型」の連携(共創参加型)を重視します。誰か一人のプロデューサーが仕切るのではなく、多様な個性が「共に(Co)」「整列(Ordinate)」して同じ目標に向かう、風通しの良い仕組みづくりが重要です。

「ボランティア」を超えた持続可能な体制

これまでは熱意ある個人のボランティア精神に頼っていた側面がありました。今後は、コーディネート機能を組織として明確に位置付け、福祉・教育・観光といった他分野とも有機的に結びつくことで、文化が社会課題を解決し、まちの活力(にぎわい)を生むための持続可能な基盤を整備することが求められているのではないのでしょうか？

2 「点」から「線・面」へのネットワーク化

市内には熱意あるプレイヤー(点)が多く存在するが、それらが有機的に繋がっておらず、活動が「打ち上げ花火」で終わっているという指摘がありました。施策に反映しないとしても、推進計画の論点として継続議論するなど、論点を明示してはどうか？

3 コーディネーターの役割

単なる「事務的な調整役」ではなく、福祉・教育・観光など異なる専門分野の言語を翻訳し、互いの強みを引き出して「新しい価値を創出(共創)」する役割であるべきとされました。施策に反映しないとしても、推進計画の論点として継続議論するなど、論点を明示してはどうか？

4 持続可能な体制

これまでのコーディネートが一部の有志によるボランティアベースに頼っていた点を反省し、組織として機能を持たせるなど、持続可能な仕組みづくりの必要性が強調されました。

以上